様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００６９８

研究課題名（和文）南西諸島における海上交通の復元的研究―「帆船の時代」の「歴史航海図」―

研究課題名（英文）Restorative study of maritime traffic in the Nansei Islands

研究代表者
黒嶋　敏（Kuroshima, Satoru）

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：９０３２３６５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,430,000円

研究成果の概要（和文）：九州南端から台湾に至る南西諸島を広域的に描き、航路などを記した航海図としての側面を持つ前近代の画像史料が残されている。本研究では、これらを「帆船の時代」における「歴史航海図」と位置づけ、そこに記載された海事情報をもとに、史料蒐集、解読と分析・検討、および現地調査を行い、海上交通の実態を復元的に考察しようとした。
　新型コロナウイルスの感染拡大により研究計画は大きく見直すこととなったが、本研究の基礎史料である正保琉球国絵図はデジタル化して「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」を構築し、公開することができた。また、とくに那覇港の海上交通について、各種絵図類を比較検討することで新たな知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　南西諸島を描いた前近代の画像史料を体系的に見直し、十分に知られていなかったものについては学術的な知見を加え紹介した。その中には「寛永の琉球国絵図」のように、本研究によって歴史的意義の解明が大きく進んだものも少なくない。
　またこれまで、その重要性にもかかわらず閲覧が困難だった正保琉球国絵図をデジタル化し、「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」を構築した。コロナ禍にあってデジタル化のニーズは高まっており、時宜に即した研究資源化を果たすことができた。
　このほか、国立歴史民俗博物館での特集展示「海の帝国琉球」展に協力し、海上交通に関する研究成果を博物

研究成果の概要（英文）：There are many pre-modern image sources depicting the Nansei Islands. These can be thought of as "historical voyage maps" in the "age of sailing ships" because they describe the routes and the like. In this study, based on the maritime information contained therein, historical materials were collected, deciphered and analyzed / examined, and field surveys were conducted in an attempt to reconstruct the actual state of maritime traffic.
Although the research plan was greatly revised by covid-19, the Shoho Ryukyu Kokuezu, which is the basic historical material of this research, was digitized, and the "Shoho Ryukyu Kokuezu Digital Archive" could be constructed and released. In addition, new findings were obtained by comparing and examining pictures, especially regarding the maritime traffic at Naha Port.

研究分野：日本中世史

キーワード：琉球王国　海上交通　帆船　大型絵図　海図　サンゴ礁　海事情報

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

琉球を含む南西諸島を描いた前近代の画像史料は、一定の点数が残されている。アジアにおける交易国家となった 15 世紀の琉球には、各地から船が押し寄せており、当時の状況を考える画像史料として、『海東諸国紀』所収地図および沖縄県立博物館蔵「琉球国図」とが注目されてきた。また、17 世紀以降になると、江戸幕府が製作を命じた巨大絵図である琉球国絵図や琉球王府製作の間切図などがあり、19 世紀には琉球を訪れた西洋人や明治政府によって近代的な測量を実施したうえで製作された海図などもある。

これらの画像史料は、それぞれの製作時期も製作主体も異なるため、個別に研究されている状況にあった。また、ともすれば陸上の描画や記載内容に関心が向けられがちで、この点で各絵図の懸隔が大きく、同列に論じる意識が醸成されにくかったともいえるだろう。

しかしながら、南西諸島を描いた前近代の画像史料では、多くのものに島々を結ぶ航路や海上交通に関する情報が豊富に記載されている。動力船が出現する以前、外洋航海において主体となっていたのは帆船であり、それぞれの画像史料に記された航路や海事情報は、「帆船の時代」の「歴史航海図」という側面で共通項を持つ。しかも、南西諸島を描く画像史料を景観年代に着目して分類してみると、15 世紀から 19 世紀にかけて、各世紀のものが連続して残されているが分かった。このような航海図と見なしうる画像史料が 15 世紀から連続して残されているのは、日本史と関わる海域では瀬戸内海を除くと南西諸島のみといえるだろう。

こうした数々の事例が残る南西諸島の「歴史航海図」を蒐集し、そこに記された海事情報を横断的に分析することで、帆船による海上交通の実態に迫ることができるのではないか。また、近代以降に開発が進み大きく変貌した港湾についても、その歴史的な景観を復元できるのではないか。本研究の開始当初には、このように考えられたのである。

２．研究の目的

そこで本研究では、空間としての南西諸島を広域的に描き、航海図としての側面を持つ 19 世紀以前に製作された画像史料を「歴史航海図」と位置づけたうえで、そこに記された航路や海事情報を読み込み、当該海域での帆船による海上交通の実態を復元的に考察することを目的とした。帆船は動力船とは異なり、潮汐や海流、天候や季節風といった自然条件の影響が大きく、それらを巧みに利用しながら航海を成立させていた。そうした航海に関する知識や情報は、現代には忘れ去られてしまったものも少なくない。あらためて「歴史航海図」に向き合うことで、海上交通に関わる情報を丁寧に読み込むことで、帆船特有の実態に迫る必要があるのである。

ただし、そのためには大きなハードルが二点あった。一点目として、画像史料は付随する文献史料を伴わないまま、単体で検討するには制約の大きい素材である。また二点目として、記された海事情報は、航海技術者を読み手とした専門性の高い記述・描写となっているため、いわゆる文献史学の範疇では正確に理解することが難しい記事も少なくない。

これらを克服するためには、各絵図の横断的な検討を通じて航路や海事情報の共通項と相違点を析出するだけでなく、絵図に関する文献史料にも広く目配りをし、その絵図自体が持つ歴史史料としての意義を明確にする必要があった。また、難解な海事情報に対して有効性を持つ素材として、19 世紀に製作された近代海図や水路誌がある。帆船と動力船が併用されていた 19 世紀に製作されたこれらの海事史料は、当時の記憶を鮮明に記している。これらを組み込み、海図・海事史の専門家より助言を仰ぎながら、そこに記された海上交通に関する実務的な海事情報を「歴史航海図」の読解にフィードバックすることとした。なおその際、当該海域ではサンゴ礁の発達が顕著であり、これが海上交通を規定する大きな要因となることを前提に、重要な港湾などについては現地調査による現状確認を経たうえで検討するものとした。

以上の作業により、各絵図に記された航路や海事情報を相対的に理解することが可能となり、帆船を利用した海上交通について、その実態に迫る大きな手がかりを得るものと考えられる。

３．研究の方法

（１）本研究の共同研究体制

研究課題遂行にあたって、航海図というテキストの性質と対象時期を踏まえ、中世から近代を専門とする各時代の文献史学研究者のみならず、関係する隣接諸科学の研究者とも協業しうる共同研究体制を立ち上げた。具体的には、全 12 名を下記のように配置した。

①海上交通関係史料（中近世島津氏）担当…黒嶋敏（研究代表者）、畑山周平（研究協力者）
②海上交通関係史料（近世琉球）担当　　…渡辺美季、麻生伸一（ともに研究分担者）
③近世日本国絵図・近代海図担当　　…杉本史子（研究分担者）
④長崎奉行所集積の関連史料担当　　…松尾晋一（研究分担者）
⑤考古学成果による港湾の地理的検討担当…片桐千亜紀（研究分担者）
⑥中国・朝鮮における関係史料担当　　…須田牧子（研究協力者）
⑦近世初期における朱印船航海図担当　　…岡本真（研究協力者）
⑧近代以前における海事史担当　　…安達裕之（研究協力者）
⑨近代海図担当　　…今井健三（研究協力者）

⑩琉球関係絵図担当　　…安里進（研究協力者、2019 年度より）

これは、南西諸島に関する「歴史航海図」と関連史料の残存状況に対応させて文献史学研究者を各担当に配置しつつ、絵図・海図や海事史・考古学の研究者を組み込んだものである。各自がこれまで培ってきた専門的な見地から知見を持ち寄り、学際的な協業のもとで共同研究を進める体制とした。

本研究において、課題遂行のために設定した基本作業は二点ある。一点目が、「歴史航海図」および付随史料をデジタル高精細撮影によって横断的に蒐集し、その解読と分析・検討を進めること。二点目が、記載情報の現況を確認するフィールドワークを行って、当該海域の帆船を主体とした海上交通についての実態追究である。以下、個別に紹介していく。

（２）「歴史航海図」の蒐集と分析

南西諸島の「歴史航海図」および付随する文献史料について、網羅的に所在情報を収集するとともに、主要な「歴史航海図」については所蔵者の許諾を得て調査・撮影を行う。収集した画像データをもとに、くずし字で記載されている島嶼・港湾・航路などの海事情報を解読し、テキストデータとして一覧化した。これは、それぞれの画像・記事を横断的に比較検証するための研究基盤の整備である。なお対象には、豊富な海事情報を持つ 19 世紀以前の近代海図を含めている。

主要な「歴史航海図」のなかで、とくに情報量の多いものが、江戸幕府の命で製作された国絵図である。琉球国絵図では奄美諸島から八重山諸島までが３鋪に分割して仕立てられており、航路を朱線で示し、港湾や沿岸部の地名を詳細に記している。製作時期により正保・元禄・天保の三種の国絵図が知られており、すでに沖縄県教育委員会より『琉球国絵図資料集』（第一集～第三集、1992～94 年）が出され、所収のトレース図と記載文字のテキストは様々な形で研究利用されてきた。だが、国絵図は一辺が７ｍを超える大型絵図で写真製版による複製には限界があるため、学術的な検討のためには、高精細なデジタル画像による公開が望ましい。本研究では、大型国絵図のなかで最も古い正保の琉球国絵図に力点を置き、そのテキストデータを作成しつつ、デジタル画像による公開方法を検討していくこととした。

（３）現況確認のためのフィールドワーク

南西諸島ではサンゴ礁の発達が顕著であり、航路上や港湾付近まで点在する岩礁・暗礁は、行き交う船舶にとって大きな危険物となった。とくに港湾付近ではサンゴ礁の制約が大きく、出入りする船舶は潮汐に留意して複雑な航路を取らざるをえなくなる。こうした海上交通を規定する重要な情報は、「歴史航海図」においても注記されることが多い。

ただし、那覇港をはじめとする主要港湾は、20 世紀以降の戦争や開発で大きく景観を変じているため、現況から往時を復元的に考察するのは困難である。しかし近代海図には、破壊されてしまった景観（とくに埋め立てられる前のサンゴ礁）などが詳細に示されており、記された海事情報を含めて、19 世紀以前の様相を遡及的に考察するための有効な手がかりとなる。また航路に関しても、海上から陸地を見た対景図を記すことで、明確に位置を特定しうる情報を記している。これらの近代海図と、それを補完する水路誌を用いることで、現況からも前近代の景観を復元的に考察することができ、それぞれの「歴史航海図」製作当時にも遡及させることが可能となる。こうした近代海図・水路誌を手がかりにすることで、現況確認において、より多くの歴史情報を得ることができる。

一見しただけでは難解な「歴史航海図」の海事情報を読み解くための基礎作業として、以上のフィールドワークは必須のものとなる。

４．研究成果

まず、前項で設定した基礎作業の二点に即し、（１）「歴史航海図」の蒐集と分析および（２）現況確認のためのフィールドワークについて、4 年間の研究期間に実施したものを項目ごとに記す。次に、本研究では 4 年間の研究期間のうち、2020 年度以降は新型コロナウィルスの感染拡大に伴う研究活動の停滞と行動制限により、多人数での史料調査・現地調査・対面での研究会開催などが実施不可能となった。このため研究計画を大幅に変更し、当初より基礎史料の一つと位置づけていた「正保琉球国絵図」の研究資源化に注力することとした。これに関するものを（３）としてまとめた。最後に、全体に関わる主な研究成果のうち論文以外のものを（４）としてまとめた。

（１）「歴史航海図」の蒐集と分析

・「歴史航海図」の蒐集

所在を把握した「歴史航海図」のうち、所蔵者の許諾を得られたものについて、調査・撮影を行った。主な調査先として、沖縄県立博物館・美術館（2018 年度）、都城島津邸（2018・21 年度）、鹿児島大学附属図書館（2018 年度）、阿久根市立郷土資料館（2018 年度）、鹿児島県立図書館（2019 年度）、古河歴史博物館（2019 年度）、東京大学史料編纂所（2018～21 年度）などがある。撮影した画像データのうち、所蔵者の許諾が得られたものについては、東京大学史料編纂所の閲覧室にて公開をしている。

・「歴史航海図」および関連史料の分析

学術支援職員（2018～19 年度）、および学術支援専門職員（2021 年度）各１名を雇用し、主要な「歴史航海図」について、記載文字情報の入力を行い、一覧化したテキストデータを作成した。このうち、「寛永の琉球国絵図」に関するものは（４）で後述する論文（［黒嶋・安里 2020］［黒嶋・安里 2022］）で公開している。また正保琉球国絵図に関するものは、後述する「正保琉球国

絵図デジタルアーカイブ」に反映され、データセットとして公開・配布されている。このほか、共同研究メンバーが各自で、論文などの形で公開を準備しているものがある。

また「歴史航海図」関連史料となる「正保三丙戌年絵図帳之写」「宮古八重山両島絵図帳（両島絵図帳）」などのテキストデータ、および従来英文のみしかなかった「（バジル・ホール）水路誌」の日本語訳を作成した。これらについても今後、公開を進めていく。

（２）現況確認のためのフィールドワーク

2018 年度は那覇港および沖縄本島南部の海上交通関連史跡について、2019 年度は運天港および沖縄本島北部の海上交通関連史跡について、それぞれ現地調査を行った。いずれも近代初期の海図をもとに、前近代の沿岸部地形に可能な限り迫りながら、関連するグスク・御嶽・古墓などを巡検した。とくに那覇港・運天港では、海上からの景観調査を行い、海図に描かれた航路の確認、および対景図との照合を進めた。調査にあたっては、関係する地元の研究者らに協力・助言を仰ぐとともに、とくに海上での調査時には、関係諸機関に相談し当該海域に熟練した船舶従事者に依頼するなど、安全には十分に配慮をしたうえで実施した。以上の調査成果については、一部を黒嶋「古琉球期における那覇港北部の景観」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』86、2019 年）などで発表をしている。なお 2020 年度以降は、コロナ禍により、予定していた現地調査はすべて見送った。

（３）「正保琉球国絵図」の研究資源化

東京大学史料編纂所所蔵の国宝「島津家文書」に含まれ、琉球の島々を詳細に描いた大型絵図としては最古のものとされる。研究者をはじめ多方面からの関心が高い絵図であるが、大型史料であるために十分な複製資料が提供されておらず、研究上に少なくない課題を抱えていた。そこで国立歴史民俗博物館に移送してデジタルスキャンを行なった。このスキャンは、同じく黒嶋が研究代表者となっている公益財団法人鹿島学術振興財団研究助成「正保琉球国絵図の研究資源化とデジタルアーカイブの構築」などと連携して実施したものである。

スキャンにより得られた高精細画像データをもとに、ＷＥＢ上で閲覧できるものとして「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」を構築し、2021 年 12 月より公開を開始した（https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/collection/degitalgallary/ryukyu/）。コロナ禍にあってデジタル化のニーズは高まっており、時宜に即した研究資源化を果たすことができた。アーカイブには、おもな機能として、高精細画像の閲覧、書き込まれた文字情報のテキスト検索、現代地図との重ね合わせ、他機関が所蔵する類例絵図との並列表示などを搭載している。これらの機能は、正保琉球国絵図そのものの分析手法を増やすことにつながり、研究のさらなる進展が期待される。また、くずし字がテキスト検索できるようになり、それぞれの地名に緯度・経度の情報を付したことで、現代地図との対応も容易に行えるようになった。これらの汎用性のある機能をもとに、学校教育や一般での利用も進むものとなろう。

（４）主な研究成果

研究成果のうち個別の論文などについては別稿にまとめているので、ここではそれ以外に特筆すべきものと、広く社会向けの発信とした試みのいくつかをまとめる。

まず、本研究で南西諸島に関する「歴史航海図」の比較検討を進めるなかで、従来は史料的な意義が十分に解明されていなかった個人蔵「琉球国絵図」を、「寛永の琉球国絵図」として位置づけた点が挙げられる（黒嶋・安里進「「寛永の琉球国絵図」について」『首里城研究』22、2020 年、同補論『首里城研究』24、2022 年）。文字情報や描画の分析から正保琉球国絵図に先行する絵図であることが明らかになったことで、15 世紀段階の地図・海事情報が、どのように 17 世紀以降に継承されていくかという見通しを得ることができた。「寛永の琉球国絵図」については、今後、多方面からの検討が必要となってくるだろう。

また 2020 年 10 月に刊行された『画像史料解析センター通信』90 号では、「首里城と琉球王国」というテーマで全 40 ページに及ぶ特集を組み、本研究の参加者のうち黒嶋、渡辺美季、須田牧子、岡本真、畑山周平、今井健三が執筆をしている。各論考では、海図「大琉球那覇港之圖」の分析をはじめ、関連する各種画像史料の紹介・検討を試みており、いわば本研究の中間報告的な意味を持つものとなっている。掲載号は全ページが東京大学学術機関リポジトリにて公開されており、今後の研究進展が期待される（https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/search?page=1&size=100&sort=controlnumber&search_type=2&q=8513&timestamp=1653543641.4335234）。

さらに、本研究の全体的な成果報告会として、東京大学史料編纂所公開研究集会「新たな画像公開方法とデジタル連携」（2021 年 12 月 3 日、オンライン開催）、および琉球沖縄歴史学会「絵図・古地図と琉球史研究」（2022 年 2 月 5 日、オンライン開催）を開催した。いずれも黒嶋が報告者として登壇したほか、共同研究メンバーを含む多くの参加者があった。具体的な数字は、前者が参加者 79 名（うち海外から 5 名）、後者が参加者 44 名（うち海外から４名）である。また国際学会でも、黒嶋が報告「琉球の絵図と海上交通（琉球的绘图与海上交通）」（中国・中山大學シンポジウム「歴史地圖與東亞形象」、2021 年 12 月、オンライン開催）を行うなどしている。

以上の学術的な成果公開のほか、社会向けの発信も積極的に取り組んだ。まず、本研究の研究成果を盛り込んだ博物館展示として、国立歴史民俗博物館にて特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―」が開催された（開催期間：2021 年３月 16 日～５月９日、来館者数 16,262 人）。前掲（３）「正保琉球国絵図」のスキャンデータをはじめ、那覇港の海図を利用した展示などを含んでおり、図録執筆には本研究から黒嶋と渡辺美季（研究分担者）も加わっている。

このほか、同じく研究成果を盛り込んだものに、本研究のメンバーである安里進の編になる『古地図で楽しむ首里・那覇』（風媒社、2022 年 3 月）がある。本研究からは麻生伸一も参画し、首里・那覇をはじめとした琉球に関する画像史料について、研究の到達点を示したものとなっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 .黒嶋敏	４．巻 988
２．論文標題 織田信長と銀山・撰銭令	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『歴史学研究』	６．最初と最後の頁 20-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺美季	４．巻 12
２．論文標題 琉日関係における明清詔勅	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『第十二回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』	６．最初と最後の頁 55-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 麻生伸一	４．巻 901
２．論文標題 近世日本の対外政策と琉球	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『歴史地理教育』	６．最初と最後の頁 18-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉本史子	４．巻 6
２．論文標題 海洋空間と情報の幕末史－海図と船艦の19世紀	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『都市史研究』	６．最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 片桐千亜紀	4．巻 718
2．論文標題 沖縄② 水中考古学の普及啓発とその取り組み	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『月刊　考古学ジャーナル』	6．最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中西裕見子・片桐千亜紀・菅浩伸・坂上憲光・小野林太郎・島袋綾野	4．巻 37
2．論文標題 沖縄海域における海底遺跡ミュージアム構想の実現に向けた屋良部沖海底遺跡での実践	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『南島考古』	6．最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒嶋敏・安里進	4．巻 22
2．論文標題 「寛永の琉球国絵図」について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『首里城研究』	6．最初と最後の頁 42-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒嶋敏・安里進	4．巻 24
2．論文標題 「寛永の琉球国絵図」について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『首里城研究』	6．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　4件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 黒嶋敏
2．発表標題 「アジアのなかの島津義久・義弘」
3．学会等名 鹿児島県歴史資料センター黎明館講演会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 黒嶋敏・安里進
2．発表標題 「「寛永の琉球国絵図」について」
3．学会等名 首里城研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 杉本史子
2．発表標題 「海洋知の再編と日本社会―19世紀「新しい海洋」のなかでー」
3．学会等名 東京大学海 洋教育センター先端的海洋教育カリキュラム検討会
4．発表年 2019年

1．発表者名 黒嶋　敏
2．発表標題 「第一尚氏期首里の外港を探る―画像史料の再検討から」
3．学会等名 中世学研究会大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 黒嶋　敏
２．発表標題 「Awareness of Borders in Medieval Japan」
３．学会等名 Tagung Core, Periphery, Frontier; Spatial Patterns of Power“（ドイツ・ボン大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 「琉球沖縄の文化と鎌倉芳太郎」
３．学会等名 INTERNATIONAL SYMPOSIUM:Art of the Ryukyu Kingdom,（スイス・チューリッヒ大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺美季
２．発表標題 「日明「勘合」交=中的琉球與台灣（日明"勘合"交渉と琉球、そして台湾）」
３．学会等名 台日明清研究交流合宿研習營（台湾・中央研究院）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺美季
２．発表標題 「在琉日関係中的明清時期詔勅文書（琉日関係における明清詔勅）」
３．学会等名 第12回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム<中国・中国第一歴史档案館）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺美季
２．発表標題 “The Oldest Map Becomes the Newest: Takemori Doetsu’s 1696 Map of the Ryukyu; Kingdom”
３．学会等名 ３．The Seventh International Symposium of Inter-Asia Research Networks, “Old Maps in Asia: Basic Information and Perspective for New Research,”(東京・東洋文庫),（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 池田榮文、瀬戸哲也、黒嶋　敏、木村淳	４．発行年 2019年
２．出版社 高志書院	５．総ページ数 190
３．書名 琉球の中世	

１．著者名 『日本近世生活絵引』琉球人行列と江戸編編纂共同研究班　（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター	５．総ページ数 230
３．書名 『日本近世生活絵引　琉球人行列と江戸編』	

１．著者名 麻生伸一・茂木仁史編	４．発行年 2020年
２．出版社 榕樹書林	５．総ページ数 270
３．書名 『琉球弧叢書34　琉球王国尚家文書「火花方日記」の研究』	

１．著者名 片桐千亜紀（共著、南島考古学会編）	４．発行年 2018年
２．出版社 ボーダーインク	５．総ページ数 262
３．書名 『南島考古入門　掘り出された沖縄の歴史・文化』	

１．著者名 杉本史子	４．発行年 2018年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 395
３．書名 『近世政治空間論 ： 裁き・公・「日本」』	

１．著者名 麻生伸一（共著）	４．発行年 2018年
２．出版社 國立臺灣大學出版中心	５．総ページ数 365
３．書名 『国立台湾大学図書館典蔵琉球関係史料集成』第５巻	

１．著者名 安里進、外間政明	４．発行年 2022年
２．出版社 風媒社	５．総ページ数 147
３．書名 古地図で楽しむ首里・那覇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	杉本　史子（山田史子） (Sugimoto Fumiko) (10187669)	東京大学・史料編纂所・教授 (12601)	
研究分担者	麻生　伸一 (Asou Shinichi) (30714729)	沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授 (28001)	
研究分担者	松尾　晋一 (Matuo Shinichi) (40453237)	長崎県立大学・地域創造学部・教授 (27301)	
研究分担者	渡辺　美季 (Watanabe Miki) (60548642)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	片桐　千亜紀 (Katagiri Chiaki) (70804730)	九州大学・比較社会文化研究院・共同研究者 (17102)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	安達　裕之 (Adachi Hiroyuki)		
研究協力者	今井　健三 (Imai Kenzo)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	安里　進 (Asato Susumu)		
連携研究者	須田　牧子 (Makiko Suda) (60431798)	東京大学・史料編纂所・准教授 (12601)	
連携研究者	岡本　真 (Okamoto Makoto) (50634036)	東京大学・史料編纂所・准教授 (12601)	
連携研究者	畑山　周平 (Hatayama Syuhei) (30710503)	東京大学・史料編纂所・助教 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関